
恋姫＋コック

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十コック

【Nコード】

N3628BA

【作者名】

尾時山

【あらすじ】

「いらつしゃい。飯？何を食いたいんだよ？」

恋姫無双の世界に迷い込んだ、高校生のコックが料理で生き抜くバカ作品。

始まりの巻　くバナナミルクは甘い誘惑く

「はあ……。親父も人使いが荒いよなあ……」

学ランに袖を通しながら、エプロンを身につける少年。大きな厨房で、ガスコンロに置いたフライパンに火をかけた。

白く輝く鶏の卵を片手で割り、牛乳と一緒にボールに入れ、菜箸で混ぜた。後ろから若い男が、それが気に食わなかったらしく、文句を言った。

「お前、ここフレンチレストランなんやから、泡立て機使えや」

「泡立て機だとホイップになっちゃうだろうが！それよりも後ろの蜂蜜取ってよ」

仕方なく蜂蜜を取ってやる。蜂蜜を受け取った少年は、ボールにそれを出し、そのあとにグラニュー糖を入れた。

食パンをどぼんと漬け、良く熱されたフライパンにバターを落とす。菜箸でバターを万遍なく広げ、ベチャベチャになった食パンをフライパンに投入、焼きはじめる。

一般的なフレンチトーストだ。残りの汁を全部入れ、フライ返しでひよいっと返し、焦げ目が付いたのを確認すると、皿の用意を始めた。

脇に、飾り付けでミントとチョコ、キャンディを置き、メインのトーストを乗せると、冷凍庫から出したバニラアイスをまるごと一個乗せ、オレンジソースをかけ、完成。厨房からそれを持って出ると、綺麗なテーブルクロスを引いた高級そうな机が所々並ぶ。所謂店内に、注文した、子供連れの家族の方へ行った。

「お待たせ致しました、フレンチトーストとオレンジソースをかけたバニラアイス、ミントとチョコを添えて、でございます」
「わあっ、美味しそう!!」

子供　小さな男の子が、少年の方を見た。少年は男の子の目線と同じ高さになるようにしゃがみ、ポケットから、ビスケットを差し出した。

「お兄ちゃんから、ボクへ」
「ありがとうございます!!」

あまりにも可愛いので、男の子を撫でた。フォークを持った男の子がトーストをアイスと一緒に食べる。甘い世界が口に広がり、笑顔が大きくなった。

「美味しい!!」
「よかった!よし、お兄ちゃんがもつとサービスしちゃおう!」
「本当!?じゃあ、ママとパパにも、美味しいもの作ってあげて!」
「うん。では奥様、旦那様。今から、料理が来ますので、何か疑問がございましたら、持ってきた者にお聞きくださいませ」

どうせフレンチだけだがな、と少年は心でぼやいた。フレンチを食すのは悪いことではない。が、それだけでは飽きてしまう。親の仕事上、仕方のないことだが。

「あ、そついや買い物行つてねえ」

自宅の食材が無いことに気付いた。店はどうにかなる。買い物の方が優先だ。

少年はエプロンを脱ぎ、店を出て、スーパーまで自転車を漕いだ。

「あつたぜ、今日の最終お買い得商品、『十勝のモくさん元気牛乳』
1L2本で1200円!6本は買つてや」

店のカゴに、お買い得商品を詰めながら回る。牛乳のコーナーに着くと、牛乳をそのまま持ち逃げしようとする人間がいた。

「おいアンタ、何してんだ」

首根っこを掴む。顔を覗き込むと、目付きが悪く、歯がボロボロの男であった。

「アンタ、モくさんの元気を金払わず貰うつもりじゃねえだろうな?」

「なんだよお前!」

「いいから聞け。そんなことしたらモくさんは泣くぞ。いいか。モくさんの元気が欲しいなら、これで貰いな」

1200円を財布から出して渡した。男は金を貰うと、礼も言わずにさっさとレジに行ってしまった。

「モくさん、あいつに買わせてよかったのだろうか」

今更ではあるが、何か心配だ。レジに向かうと、その心配が現実になっていった。

レジの店員を襲い、金を要求していた。少年はカゴを置き、顔面にドロップキックをお見舞いしてやった。

「モくさんが泣いてるぜ!!」

「ちくしょお……。てめえ、邪魔くせえんだよ……」

懐からナイフを出した。少年はそれに憤慨し、ナイフを出した手を掴み、肘で腹を撃ちながら投げた。

「料理に使えるもんを凶器にすんじゃねえ!牛や豚に呪われるぞ!!」

ゲームで見たものをそのままやってみたが、上手くいったようだ。男は完全に延びていて、レジカウンターの台に突っ伏していた。

「モくさんを眼眩^{めくらめ}ましに使うんざ、ふてえ奴だな!!」

カゴを持ち直し、レジに向かって会計を済ますと、自転車でレストランではなく自宅へと向かった。

「ただいま、って誰もいるわけないか」

父はまだ仕事だ。母も別れてしまったために、この家にいるわけがない。

冷蔵庫に、買った物を綺麗に入れ、小腹が空いたので、バナナと牛乳、バニラエッセンスを使い、簡単なバナナミルクを作って飲んだ。そのまま二階に上がり、自分の部屋に入ると、買っておいた濡れ煎餅を脇に、料理雑誌を読み始める。

「美味しいエビチャーハンねえ……。油をそんなに使わないで焼くか」

フレンチ以外にも、中華や和食なども作れる。というか、今はそれらの方が上手い。

「オイスターソースの量、多くないか？もっと減らして、香づけした方がいいような……」

舌の感覚が冴えている。伊達に鍛えてはいない。

「よし、実際に作ってみつか」

雑誌とバナナミルクを手に、ドアを開けた。

しかし、目の前に広がったのは、自分の家の廊下ではなく、宮殿の中の様な、豪華な作りの通路であった。

「……。夢でも見てるんかな？」

ドアを閉め、考える。ここは、自分の家だったはずだ。間違いは無い。

もう一回ドアを開ける。目の前には、長い桃色の髪をした少女、綺麗な黒のポニーテールの少女が立っていた。

静寂の空気が漂う。それを先に破ったのは、少年だった。

「……あのー、どちらさまでしょうか？」

「……曲者か!?!」

「あつ、えつ、へえつ!?!」

黒のポニーテールの少女が声を張り上げた。桃色の髪の子はおどおどしながら、少年に声をかけた。

「一体、どこから出て……」

「あ、あの、後ろのドアから……」

ドアノブを回し、開く。見間違えるはずのない自室。

「どうなってんだよおっ!?!」

「姉上、その者に触れては」

ぞろぞろと大勢の人間が来た。少年は自室に逃げ込み、バナナミルクをテーブルに置き、深呼吸しながら座った。

「何かの間違い何かの間違い……。ここは俺ん家、ここは俺ん家……」

「わぁー、面白そうな物がいっぱいー!!」

「……え?」

一人で逃げ込んだと思ったら、桃色の髪の子が、ちゃっかりついてきていた。

「ん〜、これは? 『美味しいエビチャーハンの作り方』……」

「あ、あの、お姉さん? なんてついて来たんですか?」

「へ? だって、面白そうだったから」

マヌケ過ぎる。少年は呆れた。

「あの、ここはどこなんですか？」

「ここは私達、蜀軍の、成都のお城だよ」

蜀？成都？三国志か。一人で突っ込みながら、少年は更に聞いた。

「お名前は……」

「私？名は劉備、字は玄德！君は？」

劉玄德。蜀の君主か。男のはずだが、目の前にいるのは、完全に女性。何が起こっているのかは解らないが、名前を聞いた以上、答えない訳にはいかない。

「新城 魁……」

「字が魁？」

「いえ、姓は新城、名は魁です」

「へえー」

ゴンゴンと乱暴にドアを叩く音。劉備は「大丈夫だよー」と声をかけた。

「面白そうな飲み物だね！飲んでいいかな？」

「ただのバナナミルクですけど、どうぞ」

飲みかけのバナナミルク。劉備が口にすると同時、ドアが思い切り開かれ、先程のポニーテールの子が、へそ出しのボーイッシュな小さい子連れ、魁を睨みつけた。

「お姉ちゃん、なにしてるのだ？」

「あつまあ〜い！！なにこれ！？スツゴく美味しい！！鈴々ちゃんも飲む？」

間接キス、とまで考える余裕がない。首に長刀を突き付けられている以上、何もできない。

「俺、敵でも何でもなくて、ここの住民なんですけど」

「ここは成都の城。このような所に、貴様の様な無礼者が住めるはず無い」

「俺が住んでたのは！！東京のただの一軒家だつづの！！城なんて知らねえよ！！コスプレ趣味のあるお前らなんざ知るかよ！！」

「東京？こすぶれ？訳の解らん」

「本当なのだ！甘いのだ！」

「愛紗ちゃんもどう？」

「桃香様……。毒物なのかもしれませんよ？」

「自分が飲んだモンに毒なんて入れるかよ！」

魁は怒った。長刀の刃の付け根を踏んで、右手でそれを持つ手を掴み、手刀で肘を打ち、一瞬の痛みで長刀を落とさせた。

すかさず右足に足払いを仕掛け、後ろにこけさせる。鮮やかなCQC。愛紗と呼ばれた女の子は、そのまま気絶した。

「うん、今のは愛紗がいけないのだ。ところでお前、どこから来たのだ？」

「俺はこの部屋の住民なんだよ。本当はこの扉を開けたら、俺ん家の木の板張りの廊下に出んのに……」

愛紗を自分のベッドに寝かせると、鈴々という女の子に答えた。

「玄德さんの話から推測すれば、ここは蜀。鳳統を失い劉彰を倒し、蜀を手に入れた。そこで、長刀をもつてたこいつが、美髯公の関雲長だとすれば、アンタは”燕人”、張翼徳か？」

「劉彰様も、雛里ちゃんも生きてるけど……」

「その通りなのだ！鈴々の名は張飛、字は翼徳なのだ！！」

鈴々とか、桃香とか、訳が解らん名が出てくる。魁の頭がこんがらがりそうだった。

「その、玄德さんの”桃香”、とか、翼徳さんの”鈴々”、とか、何なんだ？」

「真名は、心を許した相手にしか呼ばせちゃいけないだよ。私の真名は桃香。魁くんは、私を真名で呼んでいいよ」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！！美味しい物貰ったし、真名で呼んでもいいのだ！」

「は、はぁ……」

だんだん、理解が出来てきたのか、魁は返事をした。

女性の三国志。それも、史実とは全く違う。

自分がここに迷い込んだのを、魁は後悔していいのか、悪いのか、複雑な気持ちになった。

一品目 プリプリ甘海老チャーハン(前書き)

主人公データ

名前

- ・ 新城 魁あらしき がい

身長

- ・ 177cm

体重

- ・ 62kg

髪型

- ・ 黒の瞼と首の少し後ろにかかるぐらいのショート、サラサラ(ここ重要w)

アイカラー

- ・ 水色

年齢

- ・ 8/10(ぶどう) 産まれの18歳

趣味・特技

- ・ CQCなどのミリタリーアクション

・ 料理

好きな物

- ・ 牛(牛乳好きだから)

・ 銃

嫌いな物

- ・ 包丁を使って危ないことするやつ

能力(?)

- ・ 絶対味覚の持ち主

備考

- ・ 彼が2歳の時に母が浮気し両親は離婚。父に引き取られるが、父

- の料理＝ビジネス思考が嫌いな為、父が嫌い。
- ・ 幼いころから舌がよい。味覚は人より何倍も優れている。
 - ・ MGSのオタクである。そこから軍事にはまり出した。
 - ・ 専門はフレンチだが、イタリアンや和洋中など、ジャンル関係なしに料理が得意。
 - ・ 牛や豚などから栄養を貰っている存在でありながら、人を切る為に包丁やナイフを使うことを嫌う。

一品目 プリプリ甘海老チャーハン

「……………ん？」

愛紗が眼を覚ますと、先程魁に倒された部屋の天井がまず見えた。

「あ、起きた」

魁が顔を覗き込む。自慢の青龍偃月刀は無くなっていた。素早く起き上がり、後ろの、魁が趣味で買ったガスガンのSOCCOM M k・23を、バレルを持ち、打撃武器の様にした。

「やめとけ。殴り掛かって来たら、今度は本気で怒るぜ」

「……………」
「はあ……………。雲長さん。桃香さんに言い付けるぞ？『友人に手を出した』って」

「桃香様を軽々しく呼ぶ……………あれ？友人？」

「さっきなつた。鈴々ちゃんともなつたよ。いいから、銃を下ろしてくれないか？てか、その持ち方だと自爆するぞ？」

セイフティは外してある。しかもこのガスガン、ゴム弾を撃てるように改造してある。また、実銃と同じガスを使用している為、暴発する恐れもある。

「指が焼肉になるぞ。銃を渡せ」
「……………」

また攻撃されるのではないか、と警戒する。しかし魁は反撃し
していない。

「あのな、さっきのも、アンタが攻撃しようとしてたから、自己防
衛に出ただけなんだぜ？」

「……確かに、私に非があった。しかし……」

「ああ、めんどくせえ。俺はアンタの敵じゃない。言っている意味
が解るか？ 危害を加えるつもりはない。だから、銃を渡せ」

これでも渡さなかったら、CQCで銃を取るつもりでいたが、嫌
な顔をしながら銃を返してくれた。魁はセイフティをかけ、ベッド
の上に優しく置いた。

「雲長さん。この件は水に流して、宮殿の案内をしてくれないか？」

「不審者を案内して」

「あんたの君主が、雲長さんに案内してもらえって言ってたんだ。
君主の言うことを聞かないのかよ？」

言い方は悪者そのものだが、それでも効果的ではあるだろう。愛
紗はしぶしぶ了承し、後ろについて来いと言ったので、それに従っ
た。

「所で、私の武器は？」

「ああ、鈴々ちゃんが持って行ったぞ」

「鈴々とも親しくなったのか、なんて奴……」

「なんで俺、こんなに嫌われてんの？」

はあ、とため息を付きながら、魁は歩いた。

「ここは庶務所。普段はここに、大抵の人間がいる。何かあったら、

「ここを訪ねるといい」

「へえ。雲長さんもここに?」

「私は、時によっては兵社にいたりもする。ほら、そこにあるだろう?」

窓から覗くと、大勢の人間が、武術の鍛練をしている。槍や、弓や、馬術など、様々である。

「この通りを突き当たると厠へ行ける」

「まさか、水洗じゃないよな?」

「水洗?なんだそれ?」

やはり。トイレは水洗にしてやろう。魁自身、工学などの知識は中々あるつもりだ。

「この階段を上がると、姉上の桃香様のお部屋があったり、私達の寢所があったりする。下ると、大食堂と、厨房がある」

「厨房かあ。火は、薪からか?」

「それ以外に何を使うんだ?」

「俺はガスっていう魔法の気体を使って火をつけていた」

「ガス……」

「ここだと、東シナ海、つまりは呉の国から取れるはずだ。精製は面倒だけど」

「色々な事を知っているな」

「俺は雲長さん達より遙か未来の人間なんだよね。生活は時代と共に変わるんだよ」

「なるほど……。ああ、そういえば、名前を聞いていなかったな」

「性は新城、名が魁だ。覚えておくれよ、美髯公……。いや、髪が長くて綺麗だから、美髯公って呼んだ方がいいかい?」

「き、綺麗……」

照れて顔を赤くしてしまった。魁は素直に、この髪の毛の艶やキューティクルを素晴らしいと思った。自身も男としては多少長めで、しかもサラサラである。しかし、愛紗には流石に負けてしまっただろう。

「ここに男はいないのか？」

「武将としてはいない」

「へえ。珍しい」

髭面の強面な男が広大な野原を駆け抜けているシーンが自然に眼に浮かぶ。が、この世界にそんなことは無いようだ。

「雲長さん。腹は減ってないか？」

「そういえば、昼餉がまだだった……」

「よっしゃ。特別に、俺が飯作ってやる」

厨房に入りたいがだけが、さっきのエビチャーハンを作るのにも調度いい。毒を入れないかと眼付けで愛紗はついて来たが、魁は毒なんて持ってないし、まさか厨房に毒があるはずはない。

慣れた手つきで、炊いてあった米を小さな器に移し替え、卵と一緒に混ぜる。

「醤油は……ある？」

「ああ、これか？」

赤い瓶詰の液体。少しだけ器に入れ、また混ぜた。

中華鍋を出し、油を少しだけ引き、火にかける。火は愛紗が付けてくれた。

甘海老の殻を向き、蒸し器を持ち出して蒸している間に、中華鍋に先程のごはんを投入、ニンニクを薄く切って入れた後に炒め始めた。

「手際がいいな……」

「料理人だからな」

適当に野菜を細かく切ってまた炒め、少し焦げ目が付いたのを見ると、皿を勝手に出し、置いてあった桃の葉を飾って、メインのチャーハンを入れた。

蒸し海老も調度良く出来上がり、綺麗なごはんの丘に滑らせながら入れ、蓮華をつけて愛紗に差し出す。わずか15分の出来事。その早業に愛紗は感心した。

「召し上がれ」

「い、いただきます」

毒はない。アツアツのチャーハンを一口。

口に広がる海老のうま味と、卵を絡めたごはんの甘味。醤油で塩味を出して、ちょうどいい、いや、美味の料理になっている。

「美味しい、だと……？」

「美味かったか。そりゃよかった……って、なんで泣いてんだ」

あまりの美味さに、感動し始めた。蓮華に涙が落ち、キラリと光る。

「この世には、こんなに美味しい物があつたのですね……」

「なんで敬語？」

ウルウルと眼を輝かせ、魁を見た。完全に胃袋が制圧されている。

「この愛紗のこれまでのご無礼、お許しください、魁様」

「え？ああ……、へ？雲長さん？」

「字ではなく、真名で呼んでください。貴方の味に感服しました」

誰だコイツ。人が変わっている。

「あれー、魁くん。お料理？」

「ああ。食べさせたら、愛紗さんが泣きはじめちゃって」

「あららあ」

一人眼を閉じ、未だに味を忘れられぬ愛紗を脇に、桃香がチャーハンを口にした。

「……うん。愛紗ちゃんの気持ちは、よおくわかった」

ニツコリと桃香が笑う。魁の手を握り、こう言った。

「君は、味の神様だね！」

「……はあ？」

確かに、自分の味覚は、普通の人よりかはいい。だが、いくらなんでも神は無いだろう。

「愛紗さんも、桃香さんも、チャーハン食ったくらいで」

「いやはや、こんなに美味しいお料理を食べたのは、生まれて初めてだよ」

「魁様……、貴方の料理、私の胃袋を見事に討ち取りました」

「愛紗さんの言ってる意味が解らんのだが……。気に入ってくれたんなら嬉しいよ」

「気に入った？いやはや、これはもう、ご褒美だよ」

そこまで言うのは少しばかり大袈裟な気もする。魁は頭をポリポリと掻いた。

「なら、デザートも作ってやるよ。俺の料理を褒めてくれた礼だ」

少し照れながら魁が言った。と、言っても、フルーツや卵しかないので、あまり大層な物は作れない。

「牛乳はあるか？」

「うん、今朝の搾りたてなら」

生乳か。なら、尚更都合がいい。

「洋食系のを作ってやるよ」

二品目 ミルクプリンとフルーツパラダイス

ぱっぱとフルーツを切りながら、生乳と砂糖を入れた鍋を火にかけ、暫くしたに卵白を入れ、混ぜる。空いている竈を見つけると、大分とろみがついてきた時に小さな器に移し、竈にオープンがわりで入れた。

ついでに、生乳だけを熱し、クリームも作り始めた。洋菓子ではクリームは基本中の基本だ。

上にだんだんと分離してきたクリームをおたまで掬い、漉し袋で漉した。白い艶やかなクリームが出来上がる。後はこれを冷やすだけだ。

竈から器をゆっくりと出し、水に付けてそれらを冷やした。キンキンに冷たくなったら、器をひっくり返し、皿に着地させる。

後はフルーツで飾るだけ。なんと簡単な料理だろう。砂糖と、桃の果汁を入れたクリームをプリンの上に乗せた。これで完成。

「杏仁豆腐？」

「ミルクプリン。桃の香りをと共に味わう、な」

発想の料理。ミルクプリンは時々自分で食べる為に作るが、このフルーツ盛り合わせはなかなか出来やしない。こんなに質のいい果実を触ったことはない。瑞々（みずみず）しく、張りがあり、そしてサイズも大きい。

「まさか、生乳を使えるなんて思っちゃんかったが」

「牛乳は珍しい？」

「未来だと加熱殺菌とかしてるから、純粋な牛乳ってのはあんまり使えねえんだ。加熱すると脂肪分が分離してしまう。この料理に乗ってる、白いこれは、その脂肪分を冷やした物。砂糖と桃の果汁をたっぷり入れたから、甘いクリームになってる。しかし、こんな立派な桃、滅多に見ないぜ」

桃を片手に感心する魁を余所に、桃香がミルクプリンを一口。先程のバナナミルクと同じ、牛乳がベースだが、それよりも濃厚で、またピーチクリームの味もいい。

「おいしいよお、こんなお菓子、食べたことない」

「では、私も」

顔がとろけた桃香に続いて、愛紗もプリンを口に含んだ。

二人並んで顔が緩み、ミルクプリンがぷるぷる揺れながら彼女達の顔を映した。

「軍人さんがこんな顔見せたら、兵士は不気味に思うだろうな」

「ぼわわあ〜」

自分の料理で喜んでくれるのは嬉しい。しかし、彼女らの笑顔は軍人とは思えないくらい無邪気で可愛かった。

「すっごいいい匂いがすると思ったら、お菓子なのか」

「ああ、鈴々ちゃん。食べるか？」

「愛紗達のなのか？いいのか？」

「構いはしないだろうよ。特に愛紗さん達の今の顔ならな」

「それじゃ、いただきますなのだ」

どこの時代でも、女の子は甘味が好きらしい。学校にお菓子を作
って持って来ていた時とかも、まず女子が先に食いついていた。

「美味しいお菓子なのだ！これは、何て言うお菓子なのだ？」

「ミルクプリンって言って、牛乳と鳥の卵の黄身、砂糖で作れる、
簡単な西洋菓子さ」

「みるくぶりんっていうのか」。魁は料理の天才なのだな！」

「天才って程じゃあないよ。俺より美味しい料理を作る奴は一杯いる
と思うぜ？」

確かに料理の腕はあると思う。しかし、一番美味しい料理を作れ
る自信はない。

「魁様は、私が食べてきた料理で、一番美味しい料理を作っていた
だいた方ですよ？」

「でも、一番とか、あんまり興味ないんだよな」

「なんで？」

あまり聞いて欲しくはない。親父がビジネスと料理を一緒にして
いて、ビジネスで一番を狙う為なら、息子の魁さえ利用する人間だ
からだ。

魁は、自分の料理で人を喜ばせたい。お金なんかよりも大切なこ
とだと彼自身は思っている。

「料理つて、順位を競うんじゃないやなくて、人に食べて『美味しい』っ
て喜んで貰える為にするもんだろ？」

魁は苦笑いしながら答えた。親父の顔を思い出してしまふ。お前

は金を産む機械だ、と言わんばかりの顔をする親父の。

俺の料理は、笑顔を産みたい。

「お金や順位じゃ得られない物もあるんだぜ？」

「確かに。心とかは得られないのだ」

「そういうことだ」

料理で心が動いたら、作った人間はどれだけ嬉しいだろう。言葉には絶対に表せないと思う。

「そうだ。ミルクプリン、作ってみるか？」

「私にも作れるの？」

「もちろん。簡単だからな、料理下手な奴でも、これを何度か作れば、次第に馴れてくる」

「そうなのですか！よかった……。私、料理は苦手です……」

「誰にでも不得手はあるし、最初から物事が上手い人間なんてそうそういないさ。あ、そうだ……」

学ランを今まで着ていたことに気が付いた。動きにくいし、シワにはあまりしたくない。

「着替えて来ていいか？」

「全然大丈夫！」

お許しが出たところで、魁は速めに部屋に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628ba/>

恋姫＋コック

2012年1月12日00時52分発行